

# 精神科「退院後」にも目

長期入院患者が多く、入院医療から地域生活への移行が課題とされる日本の精神科医療。こうした課題解決に向け、医療現場では、患者本人に社会復帰に向けた働きかけを強め、後押しする動きが出ています。入院患者が、退院後の生活のコツを学ぶ「疾患教室」を取材し、地域移行の可能性を探った。

(蔵本早織)

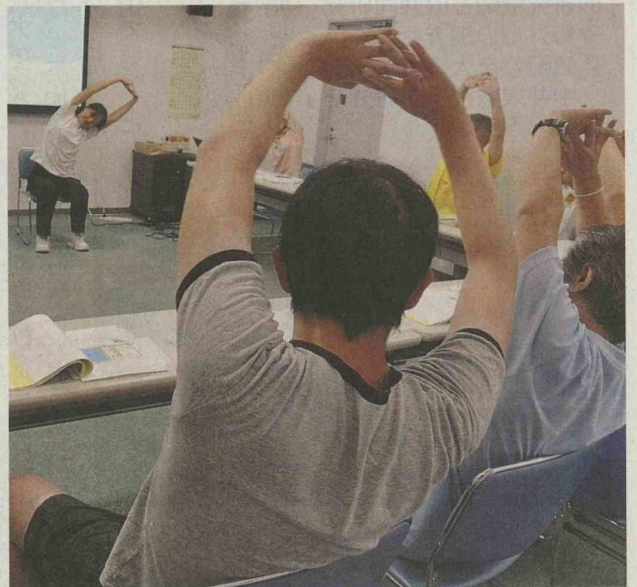
## ◆「悪い生活例」を示す

「ある男性の一日のスケジュールです。どこに問題があるでしょうか」。9月上旬、八王子市西寺方町の「恩方病院」の一室で、統合失調症を患った30〜60歳代の入院患者約15人が、疾患教室「きぼう塾」に参加していた。作業療法士が「悪い生活例」を示し、参加者に問いかける。

「インターネットにのめり込み過ぎでは」「早寝早起きして朝食をとるべきだ」「家の外にほとんど出ていない」。参加者が次々に問題点を指摘する。退院後の生活リズムの大切さを学ぶプログラムの一環。クイズ形式にすることで、参加者が主体的に取り組めるのだという。

「きぼう塾」は週一回、全8回のプログラムで構成される。医師は病気について、薬剤師は服薬について、看護師は訪問看護やデイケアなどの福祉サービスについて——といった具合に、テーマごとに各分野の専門

## ポリタージュ 多摩



作業療法士からストレッチの指導を受ける「きぼう塾」の参加者たち(八王子市の恩方病院で)

## 疾患教室 社会復帰のコツ伝授

スタッフが講師役を務める。地域で生活するのに必要な知識を多角的に学べるのが特徴だ。

### ◆病氣と向き合う契機に

プログラムの構想を練った元同院疾患教育医長の医師春日雄一郎さん(35)は、「参加者には退院後、自分の力で病氣と付き合っていくコツを身につけてほしい」と話す。精神科の患者の中には、入院生活に慣れてしまっただけで退院する意欲が低かったり、退院したとしても地域での生活に苦勞して再入院したりといったケース

が少なくないからだ。

30歳代の男性参加者は、入院3年目。「継続的な服薬や健康的な食生活の重要性など、社会復帰した際に役に立つ内容を多く学べる」と語る。退院後は実家に戻ってコンビニ店で働きながら、調剤薬局関係の資格を取ろうと考えている。

参加により、前向きな変化が表れた事例も少なくない。ある参加者は「今まで自分の病氣について学ぶ機会がなかったが、『なぜ自分が苦しかったのか』が分かった」と病氣と向き合い始めた。「退院するつもり

はない」と言っていた患者が、社会復帰に意欲を示したケースも。現場は手応えを感じている。

### ◆減らない入院患者

厚生労働省によると、精神疾患による入院患者数は全国で約32万人(2011年調査)。そのうち6割以上にあたる約21万人が入院期間1年以上、さらにその半数の約11万人は入院が5年以上に及んでいた。医療行為自体の必要性が低くても、長期入院せざるを得ない「社会的入院」の割合が突出して高いのが特徴だ。

国はこうした態勢を改めるべく、患者の地域移行を推進しているが、近年の入院患者数はほぼ横ばいで推移しており、思うように進んでいないのが実情だ。

### ◆地域の受け皿も課題

長期入院が減らない背景には、患者本人や病院の問題だけでなく、地域の受け皿不足という課題もある。精神障害者の雇用促進などに取り組むNPO法人「多摩草むらの会」(本部・多摩市)の石場亮一さんは「精神疾患に対して住民に偏見があったり、就労先がなかったりと、受け入れ態勢は十分とは言えない」と話す。

同省は今年、新たな入院患者は原則1年未満で退院できる体制を整備することを盛り込んだ指針を定め、専門家で作る検討会も「退院に向けた病院からの働きかけ」や「退院後の生活支援」といった具体的な方策の方向性を取りまとめた。がん、脳卒中、心臓病、糖尿病という従来の4大疾病に加え、同省が「5大疾病」の一つとして位置づける精神疾患。「きぼう塾」といった医療現場の努力と、国の施策推進が両輪となって、着実に課題を解決していくことが求められている。